

子どもたちは安心・安全ではない状態におかれています

知識を持たない・情報不足

社会の多くの人は、子どもへの暴力に関する情報が不足した状態にある
子どもは、彼らの安心・安全に関わる様々な領域の情報が不足している

力を持たされていない（無力化）

社会の多くの人は、子どもは無力な存在だと思っている
それによって子どもは、自分自身が力を持たない無力な存在だと思っている

孤立している

社会には子どもを支援・援助する場が少ない
子どもは支援・援助から孤立している

障がいのある子どもはさらに暴力にあいやすい状況におかれています

- 生活のあらゆる面で他者の助けを必要とするため十分なプライバシーが確保されていない
- 援助者や指導者、目上の人を全面的に尊敬するように教えられている
- すすんで人を喜ばせ、受け入れてもらおうとする
- 強く、独立した人間であるという自己認識を持たせてもらえない
- ・・・など

障がいのある子どもが暴力にあいやすい社会の状況

- 障がいのある子どもは無力で無防備だと見なされている
- 障がいのある子どもも家族も孤立しやすい
- 障がいのある子どもへの無理解や誤った社会通念、偏見がある
 - ・「性暴力について本当のことを言っているかどうかわからない」
 - ・「社会から隔離しているから安全だ」
 - ・「性暴力は受けない」・・・など

『障がい児は健常児の4～10倍の割合で虐待を受けると推定され、虐待による後遺症として様々な障がいが生じている』
 ・厚生労働省厚生科学研究班（本間博彰・主任研究者）の調査。児童相談所を通して障がい児の被害実態を調査した初の調査。（2001年）
 ・全国65肢体不自由児施設を対象に被虐待児の実態調査（2003年）
 『子どもの買春・ポルノ被害、3人に1人が障がいのある子ども』
 ・児童相談所が把握した子ども買春や子どもポルノの被害者の3人に1人が知的障がいや発達障がいなどの何らかの障がいがあるか、その境界域とみられる。
 厚生労働省「児童相談所における児童買春・児童ポルノ被害児童への対応状況に関する調査研究事業研究会」（2016年）
 『障がいのある子どもたちは、障がいのない子どもたちの8倍暴力の危険にさらされている』アメリカHealth and Human service省調査（2001年）

CAPの3つのアプローチ

障がいのある子どもたちは、一人の人間として、尊重されるべき存在です。「できない」と考え、決めつけるのではなく、暴力から自分を守るためにその人が持っているすべての力を発揮できるようにするための働きかけが必要です。

CAPでは、「子どもの人権意識（自分は大変な存在だと思ふ感覚）を育む」「子どもの力を信じる」ということを大切にしています。「子どもの年齢やニーズに応じ

て、知識・情報・スキルを提供する」ことで、障がいのある子どもは、さまざまな暴力から自分を守ることができます。

また、障がいのある子どもはより一層孤立しやすいものです。孤立は暴力の被害に遭いやすい要因の一つ。助け合える仲間や相談できる人がいることが孤立を軽減します。障がいのある子どもや家族が孤立しないまちの連携が、障がいのある子どもの安心・安全には必要なのです。

1. 知識・情報を提供する

2. 人権意識を育む

3. 孤立を減らす

障がい者運動の中で生まれた言葉にパーソン・ウィズ・ディスアビリティ(person with disability)、ピープルファースト(people first)があります。

障がいのある子どもへのCAPプログラム

教職員ワークショップ・保護者ワークショップの必要性

CAPが子どもの使える道具になるには、保護者や教職員との協力や連携が重要です。周りのおとなたちがCAPで得た知識や理解で、一貫性を持ち継続して共感や思いやりを持って子どもを支援することが、子どもが自分を守る力を高めることになるのです。

おとなワークショップは障がいのある子どもへの理解を深めるだけではなく、障がいへの差別を払拭し、すべての人の人権が尊重されるまちづくりをめざしています。



子どもワークショップ—生活年齢とニーズに合わせた工夫

視覚障がいのある子どもへのCAPでは、状況の説明を加えたり、音を効果的に使ったりなどします。

聴覚障がいのある子どもへのCAPでは、文字カードを使用したり、はっきりとした話し方、豊かな表情やジェスチャーなど工夫します。手話を使う場合もあります。

障がいのある子どもへのCAPは、時間や回数を重ね、スモールステップで実施する必要があります。一貫性をもって繰り返してすることが効果的です。地域のCAPグループは、現場の先生や保護者や子どもたちと十分な打ち合わせをし、楽しく、分かり易く伝えるように配慮しています。

- 絵パネル・文字パネルを使います。
- 手話や文字カードを使う場合もあります。
- 知的障がいのある子ども（軽度～中程度）に向けて、スペシャルニーズプログラムがあります。



* 知的障がいのある子どもを対象とするスペシャルニーズプログラム *
このプログラムは、先生が実施する2日間(予習日、復習日)とCAPが実施する3日間を併せて5日間構成されスモールステップで進めていきます。

予習日 ※先生が実施	CAP1 日目	CAP2 日目	CAP3 日目	復習日 ※先生が実施
安心・自信・自由の言葉とイメージ	子どものけんり 安心・自信・自由 いじめ（子ども同士）の劇と子どもができること 〈キーワード〉 いや、友だち、話す	誘拐（知らない人からの暴力）の劇と子どもができること 〈キーワード〉 知らない人、うそ、ける、ふむ、にげる、特別なさげび声	性暴力（知っている人からの暴力）の劇と子どもができること 〈キーワード〉 自分のからだは自分のもの、安心な触り方・いやなさわりかた、安心なひみつ・こわいひみつ 信頼できるおとなに話す	日常生活で活用するため、3日間覚えたことを思い出し、復習する

トークタイム

ワークショップに参加して

子どもたちの声

◎今日はとてもわかりやすくてたのしかった。知らない人に声をかけられたり、つかまえられても車イスでも逃げることがわかってよかった。いやだといえるゆうきがわいてきた。（中1）

◎ぼくは、『特別な声』を初めて知りました。それから『安心・自信・自由』は、とてもいい「けんり」だなあということも分かりました。（ろう学校5年生）

◎生きる権利のない子がいると悲しい気分です。生きる権利をうばう人がいるといやな気分です。けど、生きる権利を持っている人がいたら、優しい気分でした。自分も自由で、生きる権利を少しずつ得た気がしました。（特別支援学校高等部）

先生のアンケート

◎CAPの特別な叫び声を力強く出すことができた。（聴覚障がいのある子どものクラスにて）

◎安全な間隔を取ったり声の特徴を覚えることができた。（視覚障がいのある子どものクラスにて）

◎ワークショップを受けた後は、「いや」という意志を身振りをつけて日常的に表すようになった。（知的障がいのある子どものクラスにて）